

【図書紹介・資料紹介】『シリーズ子どもの貧困②  
遊び・育ち・経験ー 子どもの世界を守るー』：  
編著 小西祐馬・川田学 編集代表 松本伊智朗

宮嶋，晴子  
九州女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/6796389>

---

出版情報：生活体験学習研究. 21, pp.89-90, 2021-07-26. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：



# 『シリーズ子どもの貧困② 遊び・育ち・経験 — 子どもの 世界を守る — 』

編著 小西祐馬・川田学

編集代表 松本伊智朗



本書は、「シリーズ子どもの貧困」全5巻で構成され、「経済的困窮を基底に貧困を把握し、社会問題としての貧困という観点をとり、貧困問題を分析せず、反貧困としての観点(脱市場、脱家族)、子ども期の発達・社会的特徴と関係させて構成する」特色を持つ本であるとされている。5巻それぞれのテーマは、①生まれ、育つ基盤、②遊び・育ち・経験、③教える・学ぶ、④大人になる・社会をつくる、⑤支える・つながる、とされ、子どもの発達や生活、社会状況という多面的な論点から「子どもの貧困」の考察が試みられている。

本稿では、その中から第2巻の「遊び・育ち・経験 — 子どもの世界を守る —」について図書紹介を行う。内容は、「第1部 遊びと経験の意味」「第2部 子どもの世界を守る実践」「第3部 育ちの基盤を支える」によって理論、実践、基盤(環境)とされ、序章、終章を含め合計13章で構成されている。

序章 子どもの世界の中心としての「遊び」

## 第Ⅰ部 遊びと経験の意味

第1章 貧困と子どもの経験

第2章 生きるためにあそぶ

第3章 遊びと遊び心の剥奪

## 第Ⅱ部 子どもの世界を守る実践

第4章 遊びと育ちを支える保育実践

第5章 みんなが気持ちいい学童保育

第6章 やはり、授業がプレイフルであること

第7章 地域子育て支援拠点事業の多様なあり方

第8章 放課後の地域の居場所から考える

## 第Ⅲ部 育ちの基盤を支える

第9章 子どもの健康と貧困

第10章 子育ての分断と連続

第11章 貧困対策における保育の再定位に向けて

終章 「子どもの世界」を社会全体で守るために

私が、この第2巻でまず注目したのは、3つの点である。一つ目は、「遊び・育ち・経験」を「子どもの貧困」に対してどう議論していくかという点である。序章川田論文では、日本における「子どもの貧困」の意味が、「資本主義が生んだ“格差”における“弱者・敗者”の問題として個人化される傾向が強く、それゆえにその個人や家族を“より強い”主体に開発しようとする。この発想が(略)人間の自律性と自由という根本原理をゆるがせにするおそれがある。」また「保育・幼児教育においても(略)『子ども主体の遊びが重要』と言われてはいるが、それは『非認知能力』とか『社会情動的スキル』といった、将来の労働者に身につけさせたいコンピテンシーを早期に発達させる効果的方法ゆえである。」また、「日本の教育改革も、就学前の段階から基本的にこの路線に乗っている。」など、「遊び」を議論することの難しさが語られている。しかし、あえて、「子ども中心の視点」から「子ども期における『育ち』を主導し、『経験』を構成する『遊び』という活動において、貧困状態を強いられることが『子どもから現在の何を奪い、どうしたらそれを回復することができるか』」を問うとされており、それはこれまでにない議論であり、「野心的試み」であると述べられており、この点に関して共感するとともに大いに関心をもった。

続いて注目した二つ目は、「子どもの世界を守る実

践」という文言を使って実践が紹介されている点である。具体的には、「子どもの体験機会が市場化する中で貧困・低所得世帯も含めて活動への参加が『選択』されている」中、あらゆる子どもが関りを持てる実践を対象に、第4章の乳幼児を対象にした保育所実践、第5章の児童を対象にした学童保育実践、第6章の小学生を対象にした学校教育の実践、第7章の乳幼児親子を対象にした地域子育て支援拠点事業実践、そして、第8章の放課後の地域の子どもの遊び場実践の5事例が取り上げられ、それぞれにおいて、子どもの世界をいかに守るかにこだわって論じられているところである。

中でも、第4章山岡論文では、「様々な生育状況の中で、一筋縄ではいかないことが現場ではあまりに多くなっている。」としながらも、「保育園は、子どもの生活を保障し、遊びを展開する中で、子ども同士の育ちあいを保障していく場である。様々な家庭背景や困難を抱えていても、保育園という生活の場で、共通体験を重ねて、イメージを共有することが可能であり、そこから広げる遊びは無限の可能性をもっている。」という。そして保育園が「頑なに鎧で自分を守らなければならないような環境で育ってきた子どもたちには、まず『ここは安心できる場所だよ。ここにきたら自分を素直に表していいんだ。』が実感できる場になることによって、「子どもが遊びを通して自己実現していく」ことが可能となり、『自尊感情』と『自己肯定感』を育むことが出来ると実践を通して実感したとある。

また、第8章山下論文では、増えてきた子どもの放課後施策に対し、「大人の意図が入り込みすぎる」、また、「放課後の学校化（池本2009）」によって、「子どもは受け身となり、『子ども主体』は脅かされてしまう」のではないかという問題意識から、地域を舞台に「多様な背景を抱えた子どもが、その子の意思でふらっと立ち寄り、子ども主体の遊びを展開する。子どもらしく生きることが出来るからこそ、無自覚のうちにエネルギーを蓄えて、また日常に戻っていく。」ことを目指した子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」実践をもとに考察されている。そこでは、多様な「子どもが自ら居場所にしていく自己化プロセス」が見いだされ、「子どもの世界を守る実

践」の重要性が実感できる。またここでは、「人の方を変える（環境に人を適応させる）ことで対処しようとしてきたのに対し、（略）環境に人を一方的に『適応（adjustment）』させるのではなく、人と環境の『適合（fit）』を目指す。」というコミュニティ・アプローチの視点が「子どもが自己化していくプロセス」や「遊び場での『隙間』『領域性』『主』」の環境への着目と類似している点から、「子どもの貧困」支援の可能性と課題について述べられている。

最後三つ目に注目したのは、第2巻の多くの章で語られていた、「信頼できる大人の存在が不可欠」という点である。第4章の山岡論文では、保育者について、「しっかりと目と目をあわせ、子どもの気持ちやことばを受け止める。」「子どもの寧面の気持ちに心をよせ、心の奥にある（略）願いに寄り添いながら一緒に歩いていく。」存在でありたいといい、第8章の山下論文には、市民から保育者や教師、専門家に至る子どもの「遊び・育ち・経験」を伴走する大人の専門性は、「専門性を出さずに」「子どもとフラットな関係」「非専門家態度をもったよき隣人」として子どもと関わることが重要であるとされ、ここにも「子どもの主体性」「子どもの世界を守る」ための大人の関りや居方が語られている。また、これら大人の関りは、「貧困の支援現場には十分転用可能なもの」とされている。

本稿では、筆者の興味関心をもとに、60名が執筆されたシリーズ全5巻の中から第2巻を中心に自由に紹介させていただいた。自身の研究に大いに参考になったことは言うまでもないが、図書紹介としては十分でないことはご了承いただきたい。そこで最後に、その発行に至るまでのエネルギーや内容に大いに敬意を払いつつも、5つの柱に収まり切れない領域が見受けられ、議論が拡散してしまったような印象を受けたことを一言お伝えしておきたい。「子どもの貧困」は今後も検討が必要な現代的課題であることから、可能であれば、より細分化した領域毎の整理を試みていただきながら、さらなるまとめを期待したい。

[明石書店、2019年、2,500円（税別）]

（九州女子短期大学 宮嶋晴子）